

中江俊夫

詩集『魚のなかの時間』から



中江俊夫氏（1933年～）

©Nakae Toshio

目次

物音	2
記憶	2
夜	3
夜と魚	4
人影と魚	5
夕方	6
孤独について	6
父の故郷は	7
草原を見つめる馬	9
もとの景色	10
付記	11
著者略歴	11

## 物音

そつと 物たちがふり向く

すると「誰れ」？ と言うことばが

もう両手をあげて

小闇にはしつていく

その時

私たち二人の 世界がわからなくなり

お互いの心臓と ふれあったりして

思わず

「どうしようか」 となんか

ためらいがちに 笑ったりする

## 記憶

どのようにして 人は

死んでいくのだろうか

まだ沢山 話があったのに

自分でも忘れたうちに

死んでしまったのでは ないのだろうか

すっかり あの雪のなかに埋れてしまつて

あの旅を 誰がたどることが出来るのだろうか

たちさる時 昼だった

今も 昼なのに

そして もう夏なのに

今も 雪がふっていて

トランクの中の 心のわすれものを

あの人は わすれなかった手袋の

そんなことを おもいだす事もあるのだろうか

## 夜

町はずれを歩いている人が

そっと マッチを摺る

子供がベットに寝ると

その子の母がきてどこかにつれていく

夜が三度きくが

誰も返事をしない

しじまの油断を見すまして

鋭く 道ばたの木が叫ぶ

一人が小走りにとおってゆく

みんなしっているのだが

夜だけがしらないので

不思議におもって

「だれ」「だれ」と問うているうち  
問うている自身  
どこにかわからなくなってしまう

## 夜と魚

魚たちは 夜

自分たちが 地球のそとに

流れでるのを感じる

水が少なくなるので

尾ひれをしきりにふりながら

夜が あまり静かなので

自分たちの水をはねる音が 気になる

誰かにきこえやしないかと思つて

夜をすかして見る

すると

もう何年も前にまよい出た

一匹の水すましが

帰り道にまよつて 思案もわすれたように

ぐるぐる廻っているのに出会う

## 人影と魚

一日中 人影が

うろろうろするので

魚たちがいやになる

川岸がかげになって

機械の音がしはじめ

何事が起ったのかと

魚たちが 出たり入ったりする

自分たちの巢から

何だかよくわからないので

水の澄んだほうに集まっている

地球がかすかにふるえている

それを 魚たちが知っている

危機がせまっている

それを魚たちだけが感じるのだ

それでのがれていく

ほかに

どうしようもなく

川上に 川上に

のがれていく

## 夕方

なにか

「それから」

と言おうとして

まだなにもいっていない

だれか

それをきいていたのだろう

「それから」 と

すぐうしろでひきつぎ

わたくしにかまわず話していく

わたくしはとまどいして

理由もないのに

仲間はずれにされた子供のよう

この不意の人に

それでも それをとがめることが出来ず

そのときの部屋に もう

わたくしがいないのを感じる

## 孤独について

森のなかの 一羽の鳥を見るな

それらはひとりでも

遠くのものとは結ばれあっているのだから

一匹の魚を見るな

その川でもう 魚は

どの魚とも話せないだろうから

一つのことを思っているな

そのとき 夜がくる

あなたはその夜について語れなく たおれる

あなたがそこにはないものを見るとき

そこにあるものについて

ためらいがちにかたるものがある

あなたの中の気がつかないひとり

そのとき 帰るのを忘れている

森のなかの 一羽の鳥のように

## 父の故郷は

父の故郷は

山鳩のなき声をまねする 犬がいる

あまり吠えるので

夜は遠慮して

とおくから見守っている

たくさんの小山が

いろんな話をしていると

その間をまがりくねって流れている川が

いっしょうけんめいきき耳たてるが

いまにも消えそうだ

野鼠は 誰も追いかけないのにはしる

蛙も 魚も 小鳥たちも

影があまり多いので

誰かに見られていると思っっている

海の水がこつそりあがってきて

葦の茎にさわるが

その頃になると

だれも うつとりと自分を忘れてしまっている

皆んな 疲れて眠ってしまうので

夜が明ける前くらくなる

それでだれも夜明けをしらない

長い昼間を

つらいと言うように……

## 草原を見つめる馬

遠い 稲妻がある

それを誰も見たものがない

馬はこうして

二千年も前からここにうつぶしている

どこやらで太陽が照っている

そしてまた どこかで灯がともる

(町があるのかもしれない)

なにもかも そのまま消えてしまっている)

この世界の

最後まで

馬は このまま残っているだろう

とぎれていく小川と一緒に

魚が まだ細い声でうたっている

太陽は照っているともつかない

馬はふしているともつかない

そのままの 姿である

## もとの景色

風がおるたびに

沼地のどろの中で

身動きが出来ない不満な

野草の小さな生命が

たった一つ ひそかに目覚めて言う

「もう一度 太陽の見ている前で

自分自身の力をためしたい

あらゆる生命を 僕の上でやわらげてやろう」と

その意図は大切なのだが

あなたひとりで出来はしない

いつかの家畜たち

何羽かの鳥たちよ

手つだっておくれ

お前たちの見た幾本かの木は

誰にも思いだせないだろうから……

〈付記 収録詩篇について〉

『魚のなかの時間』は著者の第一詩集。昭和27年（1952年）10月20日発行。二百部限定で、自費出版（第一芸文社）。この詩集の収録作品のうちから、とりあえず10篇をえらびました。著者18歳の頃の作。

中江俊夫（なかえ としお）

一九三三年、福岡県久留米市に生まれる。

主な詩集に、『魚のなかの時間』（一九五二年）、『暗星のうた』（一九五七年）、『拒否』（一九五九年）、『語彙集』（一九七二年）、『火と藍』（一九七七年）、『不作者』（一九七九年）、『就航者たち』（一九八七年）、『気体状』（一九九四年）、『梨のつぶての』（一九九五年）、『田舎詩篇』（一九九七年）、『伝言』（二〇一〇年）、『かげろうの屋形』（二〇一二年）などがある。翻訳に、ジュール・ラフォルグ『地球のすすり泣き』（一九七五年）。

\*この「詩の図書館」内のあらゆる画像や文章などの情報を  
無断転載することは著作権侵害にあたる行為のため禁止します。